帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

中世宗教考古学の課題

時枝　務

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．呪術の世界
(1) まじないの考古学
(2) 地鎮・鎮壇
(3) まじない札
(4) 呪術研究の可能性
Ⅲ．聖地の考古学
(1) 塚研究の進展
(2) 中世の経塚
(3) 山岳宗教の考古学
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

本稿は、中世の宗教考古学の成果を振り返るなかで、その研究方法について整理し、宗教考古学の可能性について考えることを目的とする。前半では呪符などの遺物をめぐる研究に言及し、後半では宗教遺跡をとりあげ、それぞれ現状をふまえ課題を展望する。

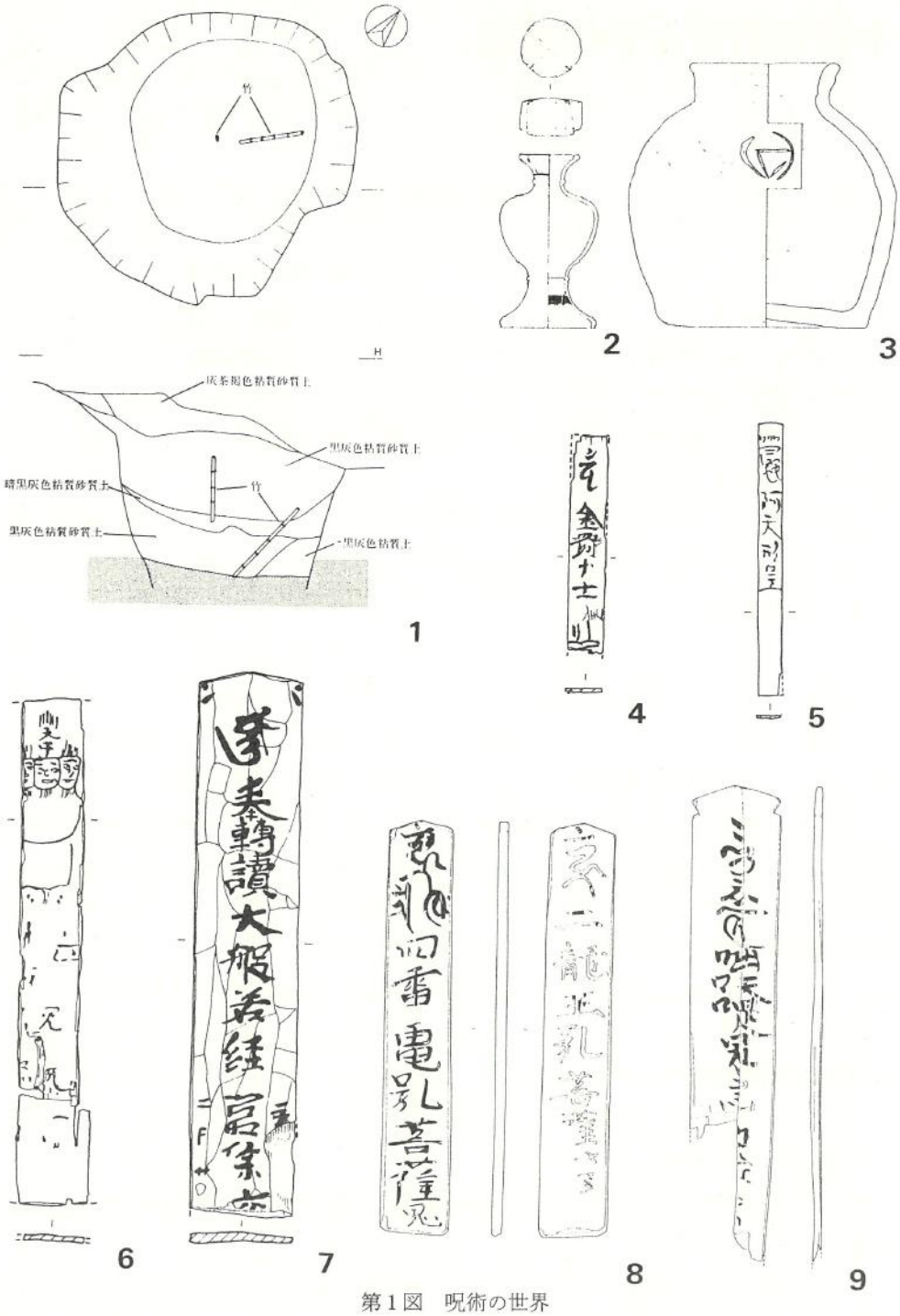
ただし、本稿で扱うことができる範囲はきわめて限られており、中世の宗教のほんの一部にすぎないことをあらかじめ断わっておかねばならない。社会的にも大きな勢力をもっていた寺社にかかわる遺跡・遺物、葬制・墓制を物語る墳墓や石塔などについてはそれぞれ別に詳細に論じられるので、それらに直接関連する遺跡・遺物については原則として省略した。なお、鎮壇具は寺社にかかわる遺物であるが、行論の必要上言及した。

Ⅱ．呪術の世界

(1)まじないの考古学

中世の宗教考古学のなかでもっとも数多くの研究が発表されているのは「まじないの考古学」であろう。

研究の基礎となる中世の呪符をはじめとする呪術資料については、すでに全国的な集成作業がおこなわれ、1984年と1990年の2度の「まじないの考古学」をテーマとした研究集会がもたれるまでになっている（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1984,広島県草戸千軒



第１図　呪術の世界

１.竹を残した井戸、２・３.鎮壇具、４～９.まじない札（１・４～９草戸千軒、２・３－乗谷）
縮尺１．30分の１、２～９．４分の１

町遺跡調査研究所ほか1990）。

「まじないの考古学」が多くの考古学者に受け入れられたのは、水野正好が「呪符や呪句の展開、まじないの各時代の在り方を見ることを通じて、その時代に生きた人々の真実の息吹きが私たちに伝ってくるのではないか」というように、まじないの研究によって人々の生きざまがあきらかになることが期待されたからであろう（水野1978ａ）。

「まじないの考古学」が生活全般に及ぶ幅広いものであることは、水野による総括的な論文の項目が「百済王奉献護身剣の世界」、「誕生と没故のまじなひに」、「国家と招福除災のまじなひ」、「愛憎とまじなひ世界」、「家宅とまじなひ世界」、「まじなひ世界と鬼神」、「遊・宴とまじなひ世界」ときわめて多岐にわたることからもあきらかである（水野1985ａ）が、かならずしもその全体像が示されているわけではない。とくに、古代から中世へ、そして中世から近世へという時間軸に沿ったかたちで、呪術がどう変化したのかという点についてはほとんど知ることができない。また、中世において呪術が日常生活をどう規制していたのかを、村落や都市という地域社会のなかで解明するという作業も十分におこなわれていない。その点、「まじないの考古学」の全貌がわれわれの前に示されるまでにはまだ若干の時間を必要とするようであるが、個別事例の研究は確実に集積されつつある。

それらの事例は、遺構や出土状態から呪術にかかわることが知られる場合と、呪符や墨書土器のように文字を媒介として呪術に関連することが判明する場合とに大別することができる。

前者の代表的な事例は水野正好のいう「埋井の呪儀」の場合である（水野1978ｃ）。

彼は広島県草戸千軒町遺跡の竹筒を残した井戸に注目し、それが井戸を埋める際に「金貴大徳」の呪符をつけた青竹をひきあげ、井中に節を抜いた息竹を入れる儀礼の痕跡であることをあきらかにした（水野1976）。また、奈良市東大寺西面大垣跡や京都市の事例を加え、「吉田家日次記」応永10年（1403）正月の記事によって「埋井の呪儀」の具体相を示した（水野1978ｃ）。さらに、「金貴大徳」が守宅神と鎮家女のあいだに生まれた５人の子どものうちの金貴と大徳の２人を指すとし、２人は「それぞれ竈神・井神と係り合い、その鎮め－竈鎮め・井鎮めの呪儀の主神として働くだけに家宅や家族の安寧と深く関連する『荒神』とも結合し荒神供の世界でも重要な役割を果たすこととなる」と説いている（水野1988ｂ）。彼の「埋井の呪儀」に関する研究は、発掘された井戸に残されていた竹筒の出土状態の検討と「金貴大徳」の文字の意味の解明の二つの部分からなっており、前者が基本的には考古学の方法によっているのに対し、後者はどちらかといえば宗教民俗学的な方法によって文字に籠められた象徴的意味を解読したものという色彩が強い。

水野の研究以後、「埋井の呪儀」にかかわる資料は増加しており、地域を限定して変遷をあとづけることも可能になってきた。たとえば、駒見和夫は新潟県下の事例によって古

代から近世にいたる井戸の祭祀の変遷をたどり、その画期の設定を試みている（駒見1992）が、そうした試みはまだ多くなされていない。

(2)地鎮・鎮壇

また、地鎮・鎮壇も前者の典型であり、「埋井の呪儀」に比較すると圧倒的に多くの研究が蓄積されている。

森郁夫は密教の影響によって地鎮・鎮壇の作法が大きく変化したことを指摘し、東密・台密それぞれで作法を異にし、さらに流派によって儀軌に違いがあるというような複雑な様相が展開していたことをあきらかにした（森1977）。そのうち、東密の作法については、木下密運・兼康保明が東密の土公供作法をとりあげ、その儀礼の実態とそれを支える世界観を解明してみせた（木下・兼康1976）。

その成果をうけて、木下密運は中世の地鎮・鎮壇についての概説をまとめ、密教の修法のあり方から「地鎮・鎮壇」、「結界」、「土公供」、「鎮宅・安鎮」の4類型に整理した（木下1984b）。そして、地鎮と鎮壇を区別したうえで、地鎮が「お堂を建立する前、土地を拓いて基壇を築く以前に」修する法、鎮壇が「基壇を築いてお堂を建てて後、堂の床板を張る直前に」修する法、結界が「障害神を追い出し、一切の良い方の鬼神、一切護法善神鬼を迎え入れる」修法、土公供が「本来密教にない作法で、陰陽道の大土公祭、あるいは小土公祭といったものから影響を受けて作られた」修法、鎮宅・安鎮が「屋固め」の修法であると定義し、それぞれの作法について解説した（木下1984b）。また、木下は、地鎮・鎮壇にともなう結界の実態を、大阪府天野山金剛寺多宝塔の事例によって具体的にあきらかにした（木下1979）。

木下の研究方法は、いずれも豊富な密教に関する知識に支えられて、遺跡・遺物がどのような修法の結果残されたものであるかを読み取るというもので、考古学と密教学の総合のうえにはじめて可能なものであるということができよう。その点、水野の方法と同様、考古学の方法以上にそれを補う宗教学などの占めるウェイトが大きいことが指摘できよう。

木下の研究成果に大きな影響を受けながらもより考古学の方法に忠実に研究しようとしたのが嶋谷和彦であろう。彼は木下の4類型にもとづいて「地鎮め」の概念と方法をまとめ、それにともなう代表的な遺物を「A輪宝・橛・賢瓶」、「B輪宝等墨書土器」、「C銭貨と皿」、「D羽釜と皿」に整理して、地鎮・鎮壇の考古学的な類型化の可能性を提示した（嶋谷1992）。そのなかで、「“地鎮め”把握の留意点」のもっとも基本的なことは「出土する遺物には、使用・消費していたものが不要になった為に廃棄されたものと、明確な意味や目的があって意図的に埋納されたものがあるが、“地鎮め”は後者の意図的埋納資料であるということである」と述べているが、「地鎮め」研究における出土状態の重要性を指摘したことばとして傾聴に値する。

ただし、遺物の出土状態が廃棄と埋納の2類型でくくれるわけでないことはいうまでもなく、「遺棄」・「廃棄」・「流入」・「埋納」など住居跡を中心とした最近の遺物出土状態の研究成果を取り入れる必要があろう（桐生1987）。「地鎮め」の遺物出土状態の場合でも、アプリオリに「埋納」であると決めつけるのではなく、当然「流入」のような2次的な変化も考慮されてしかるべきであり、古代の塔跡で確認されている地鎮・鎮壇のための撒銭の結果の銭貨の出土状態は「遺棄」、それも「放置」の概念で理解できるものであることに留意しなければならないであろう。

出土状態のより正確な把握と出土遺物の基礎的な研究という考古学の方法による地道な作業のみが新たな地鎮・鎮壇研究の地平を切り開いてくれる唯一の方向であろう。

(3)まじない札

後者の主体は、水野のいう「まじない札」、すなわち呪符である。

水野が示した「まじない札」は百怪呪符・天刑星符・物忌札・触穢札・神事札・鎮札など多くの種類に及び、「災難・疫疾を防ぎいやすだけでなく、夫婦の和合離別、富貴獲得、出産誕生、夢見善悪など生活全般にわたってきめ細かく定まり、多くの秘符をも用意して対応する体系を鮮やかに作り出しているのである。生活にこれ程までに浸透しているだけに、まじない世界は過去の人々の生活の基盤、よりどころとして、安心立命の基礎として大きな役割を果たしていたといえるのである」（水野1981年a）が、そのほとんどは木に墨書したいわゆる呪符木簡である。

では、水野はどのような方法によって「まじない札」の内容を読み取ったのであろうか。具体例をみておこう。

草戸千軒町遺跡出土の「三宝荒神符」の場合、描かれた三面の顔からそれが三宝荒神であると推定し、「天中」の文字から天中節、すなわち八朔日にかかわるものと判断したうえで、現行の民俗事例などから「三宝荒神と天中の呪句の習合の背景」に「火神を龍なり蛇とする構図があ」ると読む（水野1977）。さらに、顔の下に「鬼」字が横3列・縦4字、計12字配されていることに注目し、それと類似した『深秘抄』の呪符が荒神にかかわるものであることから、三宝荒神符であるとする説を補強する。そのうえで、新たに群馬県鯉沼東II遺跡から出土した表面に天中節の呪句、裏面に三宝荒神の名を記した呪符木簡を例示し、「天中節＝8月1日（八朔）、竈前にて竈神・火神である三寶荒神を祀り、その竈なり竈後の壁、家屋敷や竈屋の門にこの種のまじなひ札を貼るなり指すといった慣行」を復原する（水野1988a）。また、元興寺極楽坊出土の「八萬四千六百五十四神王呪符」の場合、『本朝怪談故事』・『祇園牛頭天王縁起』・『神道雑々集』・『因縁集』などの文献史料によって「八萬四千六百五十四神王」が牛頭天王と八将神の眷属であることをあきらかにし、さらに『祇園牛頭天王縁起』にもとづいてそれが「牛頭天王の指図に従い、その手足

となって疫疾を拡げ、時に古端長者に代表される慳貪なるもの、邪見なるもの、放逸なるものを滅ぼす一方、蘇民将来に代表される善良なるもの、実直なるもの、慈救なるものに守護を与え富貴に至らしめる、幸と不幸、正と不正の両面にわたって猛威をふるう存在」であることを指摘し、民俗事例をも掲げながら修正会との関連などその呪符の使用法に説き及ぶ（水野1979）。

これらの例からあきらかなように、呪符に記された文字を手がかりに、それを符呪集などの文献史料と比較検討することによって、呪符の意味するところを読み取るという方法を用いている。当然、そのための基礎作業として、符呪集などの文献史料の検索・収集をおこなわねばならず、水野自身、犬字奉書など「犬」の字をともなう呪符（水野1989ａ）、小児の夜啼きを止める呪符（水野1993年ｂ），釘・針うつ呪作と呪符（水野1982ａ）など呪符の集成と検討をおこなっている。つまり、符呪集などによって得た呪術の知識にもとづいて、その呪符がどのような目的と方法で用いられたかを判断するわけで、考古学の基礎的な方法である型式学とはあきらかに異なった方法に立脚している。

この方法は、かつて藤沢一夫が平城宮出土の人形と墨書土器から古代の呪術について考察した際に、『続日本紀』や『呪咀重宝記』、あるいは元興寺極楽坊の「離別祭文」を用いて呪術の内容を解明した方法（藤沢1968）と共通するものであり、藤沢によって開発され、水野によって発展させられたものということができよう。

この「まじないの考古学」の方法は水野以外の研究者にも広く受容されている。

たとえば、志田原重人は「天罡呪符」の資料を集成し、『極奥秘伝まじない秘法大全集』や『まじない秘伝』などに載っている呪符と比較することによってその働きを推測する（志田原1983ａ）。また、出土例の知られている呪符をその使用目的から「(1)物忌、(2)地鎮、(3)悪霊除け、(4)疫鬼除けに大別」したうえで、疫鬼除けの呪符を集成し、『地獄草紙』や『立正安国論』などの文献史料を用いてそれぞれの呪符の効能を解説し、さらに符呪集などにみえる事例を紹介する（志田原1986ａ）。その方法は、呪符資料の集成作業が前提にある点で手堅いが、基本的には水野の方法と同じであるといえよう。

(4)呪術研究の可能性

このように「まじないの考古学」は、中世の呪術的世界の一端をわれわれの前にあざやかに示してくれるが、いまだ個々の事例の紹介と解釈が主体であるように思う。

確かに個々の事例を正確に解釈し、そこでおこなわれた呪術がどのようなものであったのかをあきらかにしなければ研究は先に進まないであろうが、呪術を通して人々の生きざまをみようという「まじないの考古学」の目的からすれば、それのみでは不十分であることは疑いない。

ではどうすればよいのか。

さまざまな可能性が考えられるが、すでに示されているものとしては、大きくわけてふたつの方向性があるように思う。

ひとつは個々の呪術の復原をもとに、密教・陰陽道・宿曜道・神道・修験道などの呪術の実際を解明し、そのうえで中世における総体としての呪術の体系をあきらかにし、中世社会における呪術の果たした役割をあきらかにしようという方向である。

たとえば、木下密運は、呪符などの呪術資料を用いて「六字経法」・「土公供作法」・「七母女天と七鬼神」・「円護」などの呪術の実態を示したうえで、「密教の庶民化」について論じた（木下1984 a）。そこで彼は、密教が「庶民化」していく過程で、密教が陰陽道などと習合し、本来のかたちを変えてまで庶民の要求に応じた事実をあきらかにした。

この研究は、呪術が時代とともにそのあり方を変えたこと、中世の呪術が密教・陰陽道・宿曜道・神道・修験道などの枠組みを越えて交錯していたことを示した点で興味深いが、同様な試みが密教以外の宗教においてもおこなわれていけば中世の呪術の体系がみえてくるのではないかという期待を抱かせてくれる点でも注目に値するものといわねばならない。

もうひとつは、ひとつの集落、あるいは地域社会のなかで、呪術がどのようなあり方をしていたのかを探り、村落や都市における呪術の役割をあきらかにする方向である。

この方向での研究は、早く水野が和歌山県西庄遺跡で試みながら（水野1978 b）、その後深めなかったものであるが、たとえば四柳嘉章など在地の研究者によって新たな展開がもたらされた。四柳は、石川県西川島遺跡群の発掘調査の成果にもとづいて、呪符や仏具を材料に中世村落における信仰のあり方を検討した（四柳1983）。そこでは、外的要因による調査の限界から村落構造の把握が十分にできなかったため、かならずしも満足のいくものとはなっていないが、村落のなかで呪術や信仰の動態をとらえる視角が提示されたことの意義は決して小さくはない。草戸千軒町遺跡における取り組みはあまりにも有名であるが、ここでも都市構造を把握することが難しく、地方都市における呪術のあり方を解明するまでにはまだ若干の時間が必要なようである。

この方向での研究は、発掘調査者がみずからの地域史研究の一環として、集落あるいは地域における呪術の実態を分析することができるだけに、今後各地で実りある成果があげられることが期待される。

Ⅲ．聖地の考古学

(1) 塚研究の進展

近年、著しく研究が進んだ分野に、中世の塚がある。

塚とは「高塚古墳以外の『人工の土盛りによって形成された高まりの遺構』を指し、そ

の性格は『墓以外の目的をもって造られたもの』と理解されているが、さらに、平安時代以降、経典を書写し埋納した遺構である経塚についても『塚』より除外し」たものを指す概念である（坂詰1987）。

このように消去法的な概念規定しかできないのは、なによりも塚の性格が不明なためであり、塚が単一な性格のものであると断定できないことに起因している。

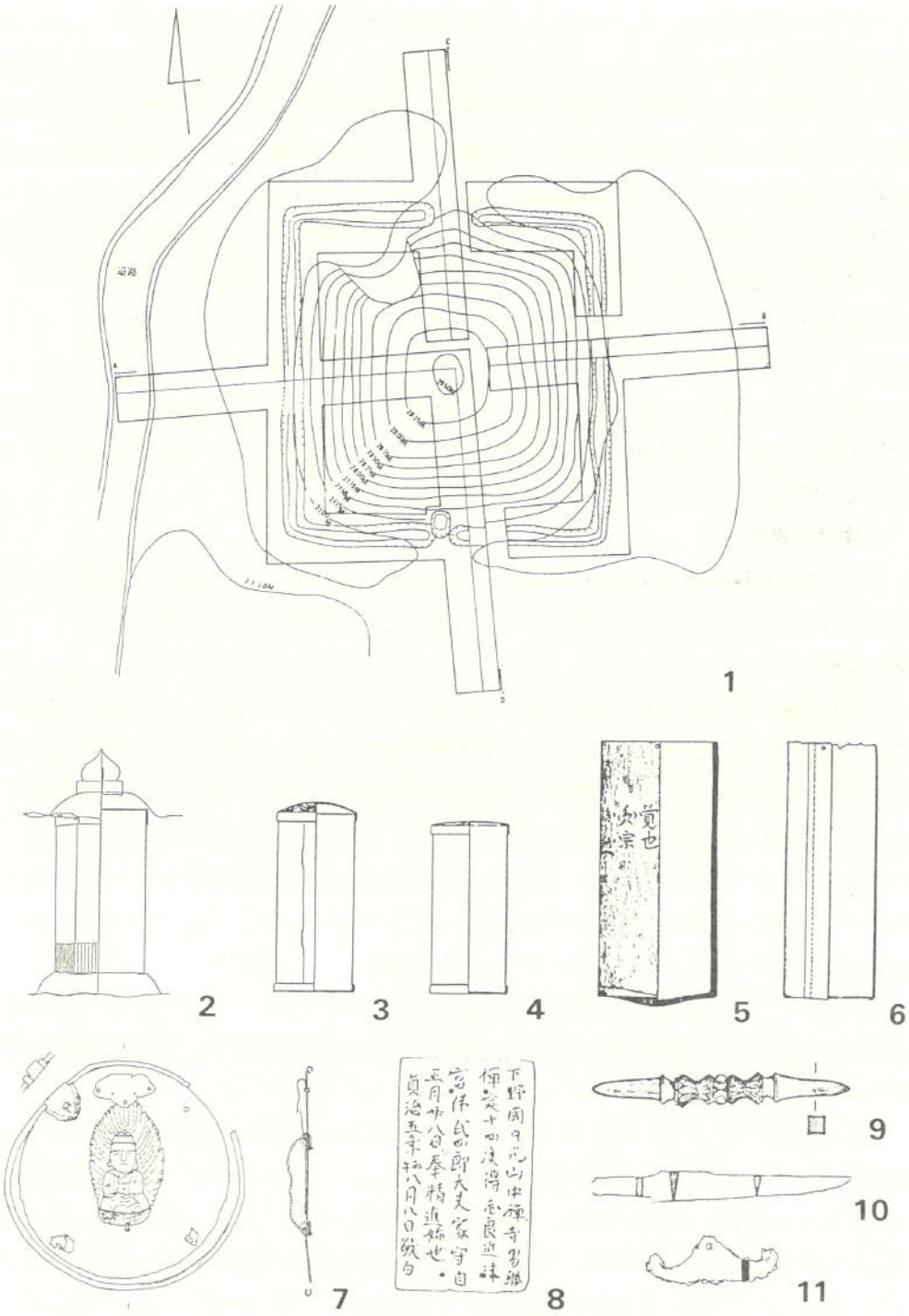
塚の性格については、それが宗教と密接な関係にあるらしいことは早くから気づかれていた（大場1971）が、近年の発掘調査資料の増加によって宗教施設であることが一層明瞭になった（野村1992）。しかも、その内容は多様性に富み、さまざまな類型が存在することがあきらかになってきた（野村1979）。修法壇や入定塚のように性格が明瞭な塚も存在するが、大部分はなんらかの宗教的な目的のために造立されたという以外判明せず、形状・構築方法・外部施設・内部施設・埋納物などの観察によって類型化し、それらの情報を総合したうえで類型ごとにその性格を究明しなければならない（野村1986）。

塚の考古学的研究は、まず塚の実態を正確に把握し、型式分類することから出発するのが常道であろう。民俗学などの成果を援用して塚の性格を考察するのはそうした基礎的作業を前提とするものでなければなるまい。唐沢至郎が塚についての研究史をまとめた際に「その調査方法も分析も考古学的方法に拠るのが考古学研究者として当然ではなかろうか。学際研究の必要性は筆者も意を同じくするところではあるが、安易な諸学の引用は、遺跡の本質を誤らしめるもとになるであろう」と述べている通りである（唐沢1987）。

塚の形態が多様であり、その造立目的や機能が単一でないであろうことは、山形県置賜地方の塚をその外形から6類型34型態に分類し、さらにその性格を「墳墓を主とするグループ」、「埋経を主とするグループ」、「修法を主とするグループ」の3つに大別した亀田昊明・手塚孝の研究によってもあきらかである（亀田・手塚1984）。そこでとりあげられた塚のなかには誤って古墳が混入しているようであるが、確実に中世と判断できる事例だけを抽出しても、その形態の多様性は否定すべくもない。

唐沢至郎は段をもつ塚を「多段築造塚」と名付け、その類例を集成し、それが東北地方を中心とした東日本に集中的に分布することを指摘し、古代の土塔との関連を想定している（唐沢1992）。その性格と系譜については慎重に検討を加えねばならないが、塚が形態によって類型化することが可能であり、設定した類型が限定された分布をみせていることを示したことの意義は小さくない。多様な形態をもつ塚も、型式学的な視点から研究を進めていけば、複数の類型とその変遷の実態をつかめる可能性があるのではないかと期待されるのである。

塚のなかでもその特異なあり方から早くから注目されてきた十三塚は、おもに民俗学者によって研究されてきたために、塚にまつわる伝説などの報告が多いわりにその実態に関



第２図　聖地の考古学

1.塚、２～４．六部の経筒、５～11．山頂遺跡出土品（1.大門第３号塚、2.円楽寺、3.奉納山経塚、4.愛宕山経塚、5～11.男体山）　縮尺１．300分の１、２～11．４分の１

しては不明な点が多かった。そこで、神奈川大学日本常民文化研究所は全国の十三塚の現況調査を実施し、主要なものについて実測図を作製した（神奈川大学日本常民文化研究所1984・同1985）。その結果、典型的な十三塚は、13基の塚のなかの1基が大きく、残りの塚はそれよりも小さい形態であることが判明した。大きな1基について、木下忠は十三仏板碑が主尊を十三仏の種子の頂部に配することと同様な意識にもとづいて造立されたものと推定し（木下1987）、民俗学者の佐野賢治は三十三年忌などの弔い上げの行事に際して止め塚として造立されたのではないかとしており（神奈川大学日本常民文化研究所1985）十三塚の性格に迫る説として注目される。唐沢至郎も十三塚が十三仏に由来するものと予測し、その配列形態について検討し、その「配列がかなり具体的な設計・規範に基ずくものである」と指摘している（唐沢1993・同1994）。十三塚の類型化を前提とした考古学的な研究によって、その変遷をあとづけることができれば、性格について実証的に考察することも可能になろう。

(2)中世の経塚

ところで、経塚の研究は従来平安時代のものがおもに対象とされ、中世の経塚がとりあげられることは少なかったが、最近は六十六部の廻国納経にともなう経塚などについても盛んに研究されるようになった。

中世の経塚を本格的にとりあげた最初の研究は、おそらく三宅敏之の六角宝幢式経筒についての論文であり、彼が冒頭で「およそ経塚の研究はこれまで平安時代を中心に進められており、中世以降はあまり問題にされない傾向が強かった。これにはそれなりの理由もあったと思われるのであるが、経塚の営造は現在もなお実施されているのであり、一貫した研究を行なうためには、中世、近世における経塚についても等閑視することなく、むしろ、より積極的に各方面からの調査を進めるべきではなかろうか」と述べているように、従来の研究動向を反省し、中近世の経塚の研究を開拓していく意欲をみせたものであった（三宅1969）。彼は25例の六角宝幢式経筒を集成し、形態・構造・銘文・図像・収納品などについて整理し、「廻国納経の遺品としては、初現的な姿ではなく、その盛行に伴う所産の一つとして、十六世紀に現われたものである」ことをあきらかにした。

こうした動向をうけて、関秀夫は経塚を「古代の経塚」・「中世的な経塚－六十六部奉納の経塚－」・「近世的な経塚－礫石経の経塚－」に区分し（関1985ｂ）、その後より整理したかたちで「古代の『埋経の経塚』」・「中世の『納経の経塚』」・「近世の『一石経の経塚』」の区分を提示し（関1990）、中世の経塚の特色を六十六部聖の「納経の経塚」に求めた。関は六十六部聖の奉納経筒をとりあげ、奉納経典と部数・奉納者と施主・奉納の願意などについて銘文を中心に検討を加え、さらに文献史料を多用しつつ六十六部聖の廻国の実態を考察した（関1988）。その結果、六十六部聖の「奉納経筒の発見地は一応中世の

六十六部の巡拝地とみることができ、その中には多くの地方的霊場も含まれたと推測」し、霊場では「『奉納』が重視され、経筒の奉納も土中への埋納も六十六部聖による納経の一環として理解され得るもの」とした。また、その後さらに資料を充実させて再論しているが、主旨に変化はない（関1990）。

ここで問題となるのは六十六部聖の奉納経筒がかならずしも埋納されたとは限らないという点であり、はたして「埋経」されないものまで経塚と呼んでよいのか、経塚の概念そのものの再検討が求められてくるのである。坂詰秀一は経塚の概念を整理したうえで、「『経塚』用語にあくまで固執して、ある約束事を前提にして用いていくのか、あるいは、経典埋蔵のあり方をそのまま把握して『埋経遺跡』として理解することにするのか、真剣に考える必要があるのではなかろうか」と問題提起し、「中世の回国納経に伴う納経の性格は『経典を納めたところ』であり、『保全を目的として埋めたところ』ではないであろうし、近世の礫石経は『経典を納めて結縁集団の名を塔碑に止めたところ』である。古代の『埋経遺跡』、中世の『納経、埋経遺跡』、近世の『納経顕彰遺跡』の呼称こそ、単なる『経塚』よりも理に適っている」と主張する（坂詰1990）。

中世の経塚の研究は地方においても活発におこなわれるようになり、たとえば田代孝は山梨県円楽寺の経筒をとりあげ、近世文書などを援用しながら中世から近世にかけての廻国納経の実態について考察している（田代1986）。また、岡本桂典は、中世の経筒の銘文を検討することによって、四国八十八ヶ所霊場の成立について論じている（岡本1984）。

このように中世の経塚の研究は、新たな局面を迎えているが、その方法は銘文の研究を主とした従来の研究法から脱していないといって過言でない。型式学の方法を導入した松原典明の試みもあるが、寸法のみにこだわったため、型式論として十分な展開がみられない（松原1989）。また、山川公見子は銘文の形式に注目し、経筒の分類を試みているが、型式を十分に把握し切れていない（山川1992）。確かに経筒の実測図すら十分に提示されておらず、個々の遺物についての観察結果も共有されていない現状からすれば、型式学的な研究が困難なことは否めない。しかし、そうした悪条件を克服して、経筒の型式分類や編年、あるいは製作技術の復原といった考古学の方法に即した研究を押し進める必要があろう。銘文中心の研究からの脱皮こそ経塚研究の最大の課題であるといえよう。

(3)山岳宗教の考古学

聖地ということばがもっともふさわしいのは、山岳宗教の遺跡、それも高山の山頂に所在する山頂遺跡であろう。

近年、各地の霊山の考古学的研究が進展し、考古資料をもとに個別霊山の信仰史を描こうとする試みが出されるようになってきた。

たとえば、戸澗幹夫は白山山頂遺跡などの踏査の経験をふまえて古代から中世までの白

山信仰の歴史を叙述したが、そのなかで11世紀中期・12世紀末・14世紀末を画期ととらえ、土器・陶器主体の9世紀後半から11世紀前半、経塚遺物主体の11世紀後半から12世紀、懸仏に代表される13世紀から14世紀、入峰札や笈岳の経筒など修験道色の強い15世紀から16世紀という変化をあとづけた。その方法は、遺物の型式から製作時期を推定し、遺物群の組成をあきらかにし、その年代的変化をたどるというものである（戸澗1992）。

また、櫛原功一・岡野秀典は、甲斐金峰山の信仰について、文献史料と民俗資料に言及したのちに、山中での採集資料を紹介し、さらに採集された土馬をめぐって考古学的な検討を加えている（櫛原・岡野1994）。そのなかで、「金峰山五丈岩の信仰時期を採集遺物から推定すると、10世紀代の灰釉陶器をはじめ、11～13世紀と考えられる金銅製円板、12世紀後半頃の経筒外容器があり、その後、主に中世と考えられる北宋銭を主とする渡来銭、江戸時代17～18世紀代の寛永通宝がある」というように整理するが、その根拠となるのはいうまでもなく遺物の製作時期である。

遺物の製作時期を手がかりに個別霊山の信仰史を復原するという方法は、与えられた考古資料が偶然出土もしくは表面採集品であるという外的条件に規制されているが、かつて述べたように、製作時期はあくまで使用時期の上限を示すに過ぎないということを忘れると大きな過ちを犯すことにつながる（時枝1993）。

その点、いうまでもないことではあるが、発掘調査によって得られた情報は質的に優れており、良質な資料を積んでいけば、断片的な資料からはうかがい知れない事実が解明されることも確かである。菅谷文則は大峯山頂遺跡の発掘調査の成果に立脚して大峯信仰の歴史をトレースし、宗教施設の推移から「竜ノ口周辺で護摩」が焚かれ、建物はない「奈良時代後末期」、「竜ノ口に建物ができ」、「固定した護摩壇」が設置された「平安時代初期」、「頂上に堂が多く建てられ」、「護摩壇が使用されなくなってからのちに、湧出岩地域、とくに本堂の位置と対峙する北東斜面に経塚が経営された」「平安時代中期」から「平安時代中期後半以降」、「山上に36坊あった」「鎌倉時代から江戸時代初期」、本堂が再建された「江戸時代初期以降」に区分している（菅谷1988）。大峯山頂遺跡では中世の情報はかならずしも多くはなかったが、その後、彼は奈良山岳遺跡研究会を結成し、大峯山系の考古学的な総合調査を推進するなかで、多くの中世修験の遺跡・遺物を確認している。彼らは大峯山系の奥駈け道の踏査を実施し、さらに小篠の宿・深仙の宿などの測量調査をおこない、古代から近世に至る大峯信仰の歴史を考古学の立場から解明しようとしている。その作業の一環として笙の窟を発掘調査したが、その結果鎌倉時代の修行窟の具体的なあり方があきらかになり、中世の山岳修行の実態に迫ることに成功した（奈良山岳遺跡研究会1995）。

菅谷らの研究で注目されるのは、彼らの研究方法が、分布調査にはじまり、必要に応じ

て実測調査をおこない、さらに発掘調査を実施するという考古学的調査の基本をそのまま実行していることである。考古学による山岳宗教遺跡の調査は、高山ゆえの悪条件にさいなまれることが多いが、彼らの仕事はそれを克服して基本的な調査を実施することがいかに大切であるかを教えてくれる。

最近おこなわれた山頂遺跡の発掘調査のなかでも、その調査方法のていねいさから注目されるのは、中世から近世にかけての遺跡である埼玉県武甲山頂遺跡の調査である。それは尾根筋に露出する石灰岩の岩陰や平坦部に設けられた神社・小祠の遺構を対象としたものであるが、その調査方法は、銭貨を主体とする出土遺物の１点１点について、その出土状態を点として記録するという精緻なものであった（小林・深田1987）。その結果、立石にともなう小祠の存在やそれに対する撒銭の状況があきらかになっている。こうした出土状態を確実に記録する調査方法は、竪穴住居跡などの発掘調査において一般的におこなわれているものであり、その方法自体にはおもに行政的な立場から批判的な意見が根強く存在するが、明確な遺構をもたない岩陰祭祀遺跡においては現時点で考えられる最高の調査方法といって過言でない。遺物の出土状態が正確に押さえられれば、遺物の組成も確実なものとしてとらえられ、遺物の使用時期や埋納時期などを推定することも容易になる。今後、ほかの霊山でもこうした調査・研究がおこなわれれば、山岳宗教の考古学的研究が飛躍的に進展することは疑いない。

Ⅳおわりに

以上、中世の宗教考古学の方法について簡単な整理を試みてきたが、そこであきらかになってきたのは、基本的な考古学の方法を踏まえたうえで、宗教の実態がどこまで解明できるかということが当面の論点であり、実践的な課題でもあるということである。宗教という厄介な対象に考古学がどこまで迫れるかは、考古学の方法の限界と可能性を正確に把握し、確実に実践する作業であるといって過言でない。対象が困難なものであればあるほど、方法が砥ぎ澄まされていくのであり、その意味では中世の宗教の考古学的研究はやりがいのある仕事かもしれない。

最初に断わったように、本稿でとりあげることができたのは中世の宗教考古学の一部に過ぎず、残念ながら触れることができなかった重要な研究が多数存在している。ほかの項目と重複する分野だけでなく、塼仏・懸仏・仏具・碑伝・泥塔・籾塔・人形・舟形木製品などなどさまざまな宗教遺物について触れることができなかったのは、筆者の不手際以外のなにものでもない。今後機会を得てまとめたい。

（東京国立博物館）

引用・参考文献

赤石光資「塚の一考察」『埼玉考古』23号　1987

井口喜晴　「山岳信仰遺跡出土の遺物－奉納品に見る山岳信仰の諸相－」『仏教芸術』168号1986

大場磐雄　「関東に於ける修験道流布の考古学的一考察」『上代文化』14号　1936

大場磐雄　「歴史時代における『塚』の考古学的考察」『末永先生古稀記念古代論叢』　1971

岡本桂典　「奉納経筒よりみた四国八十八ヶ所の成立」『物質文化』43号　1984

奥野義雄　「物忌札とその世界」『季刊どるめん』18号　1978 a

奥野義雄　「『大乗院寺社雑事記』にみる物忌札とその周辺」『季刊どるめん』18号　1978 b

小野正敏　「招福の杓子」『よみがえる中世6　実像の戦国城下町　越前一乗谷』　1990

神奈川大学日本常民文化研究所　『十三塚－現況調査編』1984

神奈川大学日本常民文化研究所　『十三塚－実測調査・考察編』1985

亀田昊明・手塚孝　「山形県における塚研究の諸問題」『まんぎり』2号　1984

唐沢至郎　「塚の考古学的研究小史」『考古学ジャーナル』274号　1987

唐沢至郎　「多段築造塚小考」『群馬県立歴史博物館紀要』13号　1992

唐沢至郎　「十三塚の配列形態に関する一試論（上）」『群馬県立歴史博物館紀要』14号　1993

唐沢至郎　「十三塚の配列形態に関する一試論（下）」『群馬県立歴史博物館紀要』15号　1994

木下　忠　「十三塚研究の視角」『考古学ジャーナル』274号　1987

木下密運・兼康保明　「地鎮めの祭り－特に東密の土公供作法について－」『柴田実先生古稀記念日本文化史論叢』　1976

木下密運　「鎮宅棟札の呪文」『季刊どるめん』18号　1978

木下密運　「天野山金剛寺多宝塔の創建と鎮壇結界資料考」『古代研究』18号　1979

木下密運　「呪術資料に見る密教の庶民化」『密教美術大観』4巻　1984 a

木下密運　「中世の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29巻　1984 b

木下密運　「除災招福の諸相」『日本歴史考古学を学ぶ』中　1986

桐生直彦　「竪穴住居址を中心とした遺物出土状態の分類について－研究史の整理－」『東国史論』2号　1987

櫛原功一・岡野秀典　「甲斐金峰山の信仰」『丘陵』14号　1994

國學院大学考古学資料館白山山頂学術調査団　「白山山頂学術調査報告」『國學院大学考古学資料館紀要』4輯　1988

小林茂・深田芳行　『秩父武甲山総合調査報告書　中巻　武甲山山頂遺跡発掘調査報告書』1987

駒見和夫　「井戸をめぐる祭祀－地域的事例の検討から－」『考古学雑誌』77巻4号　1992

坂詰秀一　「『塚』の考古学的調査・研究」『考古学ジャーナル』274号　1987

坂詰秀一　「『経塚』の概念」『古代学研究所研究紀要』1号　1990

志田原重人　「天罡符について」『草戸千軒』123号　1983 a

志田原重人　「草戸千軒にみる信仰と呪い」『草戸千軒』125号　1983 b

志田原重人　「出土呪符にみる逐疫神の様相」『草戸千軒』151号　1986 a

志田原重人　「中世の民衆と地蔵信仰－草戸千軒出土の板塔婆をめぐって－」『草戸千軒』161号　1986 b

志田原重人　「中世の民衆と神仏(1)－金剛力士と七母女天」『草戸千軒』189号　1989

志田原重人　「正月の仏教行事－「修正会」札に関する覚書－」『草戸千軒』205号　1990

志田原重人　「祈りとまじない」『よみがえる中世８　埋もれた港町　草戸千軒・鞆・尾道』　1994

嶋谷和彦　「“地鎮め”の諸相」『関西近世考古学研究』Ⅲ　1992

菅谷文則　「熊野と大峯信仰」『熊野権現』　1988

関　秀夫　「経塚遺物の紀年銘文集成」『東京国立博物館紀要』15号　1980

関　秀夫　『経塚遺文』　1985 a

関　秀夫　『経塚』　1985 b

関　秀夫　「経塚」『日本歴史考古学を学ぶ』中　1986

関　秀夫　「六十六部聖による納経の経塚」『経塚－関東とその周辺』　1988

関　秀夫　「中世六部の奉納経筒」『考古学雑誌』74巻４号　1989

関　秀夫　『経塚の諸相とその展開』　1990

田代　孝　「七覚山円楽寺の経筒と廻国納経」『山梨考古学論集』Ⅰ　1986

田辺征夫・森郁夫　「寺院の造営」『日本歴史考古学を学ぶ』中　1986

手塚直樹　「まじないに頼る暮らし」『よみがえる中世３　武士の都　鎌倉』　1989

時枝　務　「日光男体山頂遺跡出土遺物の性格－新資料を中心として－『MUSEUM』479号　1991

時枝　務　「中世山岳宗教史研究と考古資料」『帝京大学山梨文化財研究所報』18号　1993

戸淵幹夫　「遺跡遺物が語る白山信仰の軌跡」『白山－自然と文化』1992

中村孝三郎　「考古学調査からみた越後、中越の塚」『考古学ジャーナル』274号　1987

奈良山岳遺跡研究会　『笙の窟発掘調査概要報告書』　1995

奈良県教育委員会　『重要文化財大峯山寺本堂修理工事報告書』　1986

奈良国立博物館　『山岳信仰の遺宝』　1985

日光二荒山神社　『日光男体山－山頂遺跡発掘調査報告書』　1963

野村幸希　「歴史時代の塚」『考古学ジャーナル』131号　1977

野村幸希　「下総における『塚』の類型」『立正史学』46号　1979

野村幸希　「中近世塚の調査・研究の現状」『考古学ジャーナル』274号　1987

野村幸希　「塚」『日本歴史考古学を学ぶ』中　1986
野村幸希　『歴史時代「塚」研究序説』　1992
波田野至郎　「塚－越後の塚」『考古学ジャーナル』182号　1981
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　『第4回中世遺跡研究集会中世の呪術資料』　1984
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所ほか　『第6回中世遺跡研究集会中世のまじない資料集』　1990
藤沢一夫　「古代の呪咀とその遺物」『帝塚山考古学』1　1968
松下正司　「中世の人形－草戸千軒にみる俗信資料の一端－」『考古論集』　1976
松原典明　「六十六部聖の奉納経筒にみる規格性について－大田南八幡宮奉納経筒を中心として－」『MUSEUM』460号　1989
馬淵和雄　「まじないの世界」『よみがえる中世3　武士の都　鎌倉』　1989
水野和雄　「中世城郭都市一乗谷における地鎮の諸例」『古代研究』28・29号　1984
水野正好　「竹筒をのこした一井とその秘呪」『草戸千軒』36号　1976
水野正好　「三宝荒神符と天中の呪句」『草戸千軒』47号　1977
水野正好　「まじない世界研究の復権」『日本歴史』359号　1978 a
水野正好　「西庄中世集落跡の構造と一呪符」『和歌山県埋蔵文化財情報』7号　1978 b
水野正好　「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」『草戸千軒』58号　1978 c
水野正好　「まじなひの考古学事始」『季刊どるめん』18号　1978 d
水野正好　「七鬼神の信仰とその呪符」『季刊どるめん』18号　1978 e
水野正好　「五大力菩薩の呪句とその世界」『季刊どるめん』18号　1978 f
水野正好　「八萬四千六百五十四神王呪符の語り」『古代研究』18号　1979
水野正好　「中・近世考古学への語りかけ」『日本考古学年報』31号　1980 a
水野正好　「屋敷と家宅のまじなひに」『草戸千軒』88号　1980 b
水野正好　「まじない札の世界に」『月刊文化財』219号　1981 a
水野正好　「鎮井祭の周辺」『奈良大学紀要』10号　1981 b
水野正好　「釘・針うつ呪作－その瞥見録」『奈良大学紀要』11号　1982 a
水野正好　「屋敷地取作法と地鎮の考古学」『高野山発掘調査報告書』　1982 b
水野正好　「屋敷と家屋の安寧に－そのまじなひ世界」『奈良大学紀要』12号　1983
水野正好　「招福・除災－その考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』7集　1985 a
水野正好　「鬼神と人とその動き－招福除災のまじなひに－」『文化財学報』4号1985 b
水野正好　「中世－その葬と祭と」『文化財学報』5号　1986 a
水野正好　「漢礼－道教的世界の受容」『日本歴史考古学を学ぶ』中　1986 b
水野正好　「『三宝荒神符と天中の呪句』補考」『草戸千軒』181号　1988 a

水野正好　「『金貴大徳の呪句と埋井の呪儀』補考」『草戸千軒』186号　1988 b

水野正好　「犬字奉書の呪的環境」『奈良大学紀要』17号　1989 a

水野正好　「魑魅魍魎・鬼鬼鬼鬼鬼」『草戸千軒』196号　1989 b

水野正好　「『名』とまじなひ－その瞥見録－」『論苑考古学』　1993 a

水野正好　「小児の夜啼きとその呪法」『奈良大学紀要』21号　1993 b

三宅敏之　「三重県仙宮神社の経筒－六角宝幢式経筒の一例」『MUSEUM』183号　1966

三宅敏之　「塔の越経塚－廻国納経に伴う一例として」『甲斐考古』5巻2号　1968

三宅敏之　「六角宝幢式経筒について」『東京国立博物館紀要』4号　1969

三宅敏之　『経塚論攷』　1983

森　郁夫　「密教による地鎮鎮壇具の埋納について」『仏教芸術』84号　1977

森　　毅　「祈りと呪いの世界」『よみがえる中世2　本願寺から天下一へ　大坂』　1989

山県　元　「中世の信仰」『季刊考古学』2号　1982

山川公見子　「中世の埋経と納経」『季刊考古学』39号　1992

四柳嘉章　「能登の中世荘園村落における信仰－穴水町西川島遺跡群の調査から」『石川考古学研究会会誌』27号　1983

挿図出典一覧

第1図　1広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ南部地域北半部の調査』1995、2・3水野和雄「中世城郭都市一乗谷における地鎮の諸例」『古代研究』28・29号　1984、4～7

志田原重人　「草戸千軒にみる信仰と呪い」『草戸千軒』125号　1983、8・9広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ北部地域南半部の調査』1994

第2図　1野村幸希　「大門遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ1974、2田代孝「七覚山円楽寺の経筒と廻国納経」『山梨考古学論集』Ⅰ　1986、3・4松原典明「六十六部聖の奉納経筒にみる規格性について－大田南八幡宮奉納経筒を中心として－」『MUSEUM』460号　1989、5・6・8～11日光二荒山神社編『日光男体山－山頂遺跡発掘調査報告書』1963、7時枝務「日光男体山頂遺跡出土遺物の性格－新資料を中心として－」『MUSEUM』479号　1991